

日琉祖語アクセント体系の再建試論¹

中 澤 光 平

キーワード：日本祖語，琉球祖語，日琉祖語，アクセント体系，再建

0. はじめに

日本語諸方言および琉球諸語（まとめて日琉諸語という）には多様なアクセント体系が観察される一方、これらは共通の体系（祖体系）に遡ると考えられている。本稿では、近年研究が急速に進みつつある琉球諸語を視野に入れ、日本祖語（日本語諸方言の祖語）と琉球祖語（琉球諸語の祖語）および日琉祖語（日琉諸語の祖語）のアクセント体系の再建を試みる。

1. 本稿で用いる記号

- // : 音韻表記。
- A > B: A から B への変化。
- ≈ : 音声や語形のゆれ。
- :: : 対応。
- + : 語境界。
- * : 再建形の前に付ける。より古い形式には ** とアスタリスクを2つ付ける。
- 【】 : 筆者による補い。
- ↑○ : ○から高くなる。
- ↑ : ○の後が低くなる。
- ↓○ : ○が低く始まる

2. アクセント体系

アクセントという言葉は様々な意味を持つが、言語学（音声学、音韻論）の術語でアクセントと言えば、「語アクセント」という語ごとに決まった強弱や高低の特徴を指す（『言語学大辞典 術語編』：3）。日本語は英語のような声の強弱による強さアクセントと異なり、声の高低（ピッチ）による高さアクセントが区別される言語（無アクセントの方言もある）だ

¹ 本稿は2020年12月19日に NINJAL シンポジウム「日琉諸方言系統論の展望」にて「日琉諸語の下位分類とアクセント研究」と題して行った発表の一部を加筆・修正したものです。また、本稿は JSPS 科研費 21K12993（若手研究）および MEXT 科研費 21H00354（新学術領域研究（研究領域提案型））の成果の一部です。

が、方言によってアクセント体系が多様であることが知られている（平山編1960）。

表1のように、日本語のアクセントは方言間で大きく異なっているが、決して無秩序ではなく、地域間で規則的な対応関係がある。例えば、表1の「飴」、「池」と同じ対応は、(1)のように他の語にも認められる。

(1) 京都方言と東京方言との対応例

/「○○」=/【HH, HH-H】 :: /○○」=/【LH, LH-H】 「風, 酒, 鼻, 水, 道, …」
 /「○¹○」/【HL, HL-L】 :: /○○¹」/【LH, LH-L】 「犬, 色, 花, 耳, 山, …」
 （上野2006：3より。表記を一部本稿の方式に改めた）

対応が認められる場合、偶然の一致の可能性が排除できれば、言語記号の恣意性の観点か

表1 日本語諸方言のアクセントの例²

方言	東京	京都	鹿児島
飴	アメ・アメガ【LH, LHH】	アメ・アメガ【HH, HHH】	アメ・アメガ【HL, LHL】
歌	ウタ・ウタガ【LH, LHL】	ウタ・ウタガ【HL, HLL】	ウタ・ウタガ【HL, LHL】
池	イケ・イケガ【LH, LHL】	イケ・イケガ【HL, HLL】	イケ・イケガ【LH, LLH】
糸	イト・イトガ【HL, HLL】	イト・イトガ【LH, LLH】	イト・イトガ【LH, LLH】
雨	アメ・アメガ【HL, HLL】	アメ・アメガ【LF, LHL】	アメ・アメガ【LH, LLH】

（平山編1960より表記を一部改めて抜粋。Hは高音調、Lは低音調、Fは下降調）

表2 類と日本語諸方言のアクセントの対応例

類と語例	地点	東京	京都	鹿児島
2拍名詞第1類	鼻（ハナ）、鳥（トリ）、…	LH, LH-H	HH, HH-H	HL, LHL
2拍名詞第2類	型（カタ）、橋（ハシ）、…	LH, LHL	HL, HL-L	HL, LHL
2拍名詞第3類	花（ハナ）、耳（ミミ）、…	LH, LHL	HL, HL-L	LH, LL-H
2拍名詞第4類	肩（カタ）、針（ハリ）、…	HL, HL-L	LH, LL-H	LH, LL-H
2拍名詞第5類	雨（アメ）、猿（サル）、…	HL, HL-L	LF, LHL	LH, LL-H

（「拍」はアクセントの長さを構成する単位（上野2006：2））

² 査読者から、アクセントの特徴（の一部）はイントネーション単位との関係で決まり、アクセント単位だけでは議論できないという指摘があった。アクセントの実現する単位や範囲は方言間で大きく異なり、京都方言のように「語」が基本である体系以外にも、南琉球宮古池間方言のように（条件によっては）複数の文節にまたがる体系もある（Igarashi et al. 2018）ため、アクセントを語のレベルのみで論じることはできない。また、三重県尾鷲市方言のように、文頭かどうかなどの環境によって実現するピッチパターンが大きく変わる体系もある（平田2020）。表1の鹿児島方言もピッチが実現する範囲は文節で、名詞単独のパターンの情報が再建に有効かは検討が必要である。筆者は、これらの方言では実現範囲の拡張や交替が新しく生じたのであり、祖体系では語の範囲でアクセントが実現していたという仮定のもと、（文献資料を含め）語の範囲でアクセントが定まっている方言のデータを中心に再建を試みるべきと考える。

ら両者は共通の形（祖形）に遡り、祖形からそれぞれ変化して成立したという推論が成り立つ。アクセントに対応が見られることから、日本語諸方言および琉球諸語（まとめて日琉諸語と言う）のアクセントは過去の共通のアクセントから変化したと考えられている（cf. 松森他編2012：182-192）³。

現代諸方言と文献資料における単語アクセントの対応に基づいて祖体系に立てられるアクセントの対立グループを「類」（cf. 上野2006：2-3）あるいは「アクセント語類」といい、各類の所属語彙を類別語彙と言う。

祖体系の類は現代方言で全て区別されているわけではなく、例えば東京と京都では2拍名詞第2類と第3類は同じ型になっている。このように、元あった区別が失われることを合流と言い、類の合流を特に「類の統合」と言う。表2には2拍名詞の類（cf. 金田一1974：63-64）を挙げたが、2拍名詞以外の類および類別語彙の一部を(2)に示す。

(2) 2拍名詞以外の類および類別語彙（一部）

1拍名詞

第1類：血（チ）、帆（ホ）、…

第2類：葉（ハ）、日（ヒ）、…

第3類：火（ヒ）、穂（ホ）、…

（第4類：巢（ス）、…）

（第5類：歯（ハ）、…）

2拍動詞

第1類：飛ぶ、着る、…

第2類：切る、見る、…

3拍名詞

第1類：鰹、車、煙、隣、…

第2類：東（ヒガシ）、娘、…

（第3類：力、二十歳、…）

第4類：鏡、刀、宝、鋏、…

第5類：命、鰈、姿、涙、…

第6類：鰻、狐、鼠、裸、…

第7類：鯨、葉、椿、畑、…

3拍動詞

第1類：送る、曲げる、…

第2類：泳ぐ、投げる、…

類には2拍名詞第1類のように品詞の情報が含まれる。類は本来アクセントのみに基づき、意味や文法（機能）や語音（分節音）には関係ない概念のため、アクセントのみで分類したグループを「群」（本来の「類」に相当）と呼ぶことがある。また、もしも語音条件や語構成によってアクセントが相補分布をなしていることがわかった場合、それらのアクセントは対立しないことから、類として立てられない可能性がある。

類の統合の仕方を類別体系と呼ぶ（上野1985b：219）。類別体系は基本的に2拍名詞の類

³ 査読者から、有史以前の「日本語（本土方言）」は一言語ではなかった可能性があり、方言だけを資料とした「祖語」再構の可否が問われるという指摘があった。琉球祖語の姉妹語としての日本祖語が再建できるかについては最近疑問が出されている（五十嵐2021）。また、本土には非日琉諸語系の言語がかつて話されていて、現在の本土方言（の一部）はそれ（ら）を基層語として成立した可能性は否定できない。これらの、日本祖語が再建できるかという問いで重要になるのが「対応」であり、方言間で規則的な対応が見出せれば、比較言語学の方法に基づいて作業上「祖語」は再建し得る。その場合、基層語の特徴はデータ上は「改新」、すなわち祖語から分岐して新たに獲得された特徴として扱われる。比較言語学による祖語の再建とはそういうものであり、方言差が分岐によるものか基層語の影響かは関係なく、対応がある以上は基層語は祖語ではなく作業上の問題もないというのが筆者の理解である。

の統合に基づくが、内輪式と中輪式は1拍名詞の類の統合も関わる。

(3) 類別体系の例

伊吹式：II-1/2/3/4/5

中央式：II-1/2・3/4/5

讃岐式：II-1・3/2/4/5

真鍋式：II-1・5/2/3/4

寒河式：II-1/3/2・4・5

内輪式：II-1/2・3/4・5, I-1/2・3

中輪式：II-1/2・3/4・5, I-1・2/3

外輪式：II-1・2/3/4・5

西南部九州式：II-1・2/3・4・5

(II- は2拍名詞, I- は1拍名詞, $x \cdot y$ は x と y の合流, x/y は x と y の対立を表す)

「～式」は(3)のように共時論的に見た類別体系を指す。同一の類別体系を前提にしながら、その音調型を問題とするときは「～型（ガタ）」とする。例えば中央式田辺型、中央式京都型のように表現する。また、史的観点から同一の「系譜」を有すると認められるものは「～系」とする。系譜とは、同一の「系統」内の具体的な内部関係のことである（以上は上野1985b：219より）。

一方で、「～式」、「～型」には次のようにアクセント体系に関する用法もあることから、混乱を避けるため(4)でこれらの術語について整理する。

(4) アクセント体系に関する術語

式：平板式、起伏式、高起式、下降式、くほみ式、 β 式のように音調についても「～式」ということがある。

型（ガタ）：頭高型、上昇型、①型、A型のように音調についても「～型」ということがある。

型（ケイ）：二型、三型のように、(N型)アクセント体系を「～型」というが、品詞ごとの部分体系や対立数についても「～型」ということがある（動詞は二型など）。

調：半下降調、重起伏調のように、音調について「～調」ということがある。

群：高起群、低起群のように、音調のグループについても「～群」ということがある。

核：アクセント単位全体のピッチに関わる式に対し、局所的にピッチを変更する要素。

2.1 方言に基づく類の修正

松森（1997）は、瀬戸内海の諸方言で3拍名詞第5類が2つ（a群、b群）に「分裂」することを指摘している。

表3 瀬戸内海諸方言における3拍名詞第5類(a群)のアクセント対照⁴

語 \ 地点	淡路	広島	志々島	高松	飯野	三本松	伊吹島
油	H1	H0	H2	H0	H0	H0	F0 【HHM】
五つ	H1	H0	H2	H0	H0	H0	F0
命	H1	H0	H2	H0	H0	H0	F0
柘榴	H1	H0	H2	H0	H0	H0	H0
涙	H1	H0	H2	H0	H0	H0	F0
箒	H1	H0	H2	H0	H0	H0	F0

表4 瀬戸内海諸方言における3拍名詞第5類(b群)のアクセント対照

語 \ 地点	淡路	広島	志々島	高松	飯野	三本松	伊吹島
朝日	H1	H1	H1	H1' 【LFL】	H1	H1	H1
鮑	H1	H1	H1	H1'	H1	H1	H1
鱒	H1	H1	H2	L2	H1	H1	H1
姿	H1	H1	H2	H1'	H1	H1	F0
錦	H1	H1	H1	H1'	H1	H1	H1
山葵	H1	H1	H1	H1'	H1	H1	H1

(5) 瀬戸内諸方言での3拍名詞第5類の分裂

<a群> 油, 五つ, 命, 心, 柘榴, 涙, 箒, 枕, …

<b群> 朝日, 鮑, 哀れ, 姿, 簾, 錦, 山葵, …

この「分裂」について、松森(1997)は新たに生じた改新、上野(2006)は元々あった対立の保持と解釈している。改新であれば祖語に立てる必要はないが、保持であれば別の類として立てる必要がある。

淡路方言は(3)の中央式⁵に属し、「II-1/2・3/4/5」の類別体系を示す。広島と志々島の方言は真鍋式に属し、「II-1・5/2/3/4」の類別体系を示す。高松、丸亀、三本松(旧大川郡三本

⁴「淡路」は兵庫県淡路島、「広島」～「伊吹島」は香川県の各地名。アクセントデータについて、淡路のアクセント資料は発表者のフィールド調査による。広島、志々島は中井(1984)より。高松、飯野、三本松は中井(2002)のCD-ROMデータより。伊吹島は上野(1985a)より。ただし高松は戦前生まれの話者のデータを用い、通時的な変化を考慮し下降の遅れた型を「」で示した。また、話者の年齢について、査読者から明記するよう求められたが、筆者の調査データを含め、煩雑になることを避けるため、戦前生まれの話者のデータを利用することを述べるに留める(先行研究でやむを得ない場合は戦後生まれの話者のデータも用いる)。戦前と言っても明治～昭和と幅があり、世代差があることも知られている(cf. 上野1995)が、筆者の調査による経験上戦前生まれの世代はアクセントを含めいわゆる伝統方言の特徴を保っている傾向が顕著であることと、「戦前生まれ」であれば先行研究でも条件を満たし扱えるデータが確保しやすいためである。

⁵「中央式」の名称は上野(1987:16)より。

表5 中央式諸方言における3拍名詞第5類（a群）のアクセント対照⁶

地点 語	京都	祇王	中川	明石	小野	すさみ	徳島	高知
油	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
五つ	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
命	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
柘榴	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
涙	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
箒	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1

表6 中央式諸方言における3拍名詞第5類（b群）のアクセント対照

地点 語	京都	祇王	中川	明石	小野	すさみ	徳島	高知
朝日	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
鮑	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
鱒	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
姿	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
錦	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
山葵	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1

松)の方言は讃岐式で「II-1・3/2/4/5」の類別体系、伊吹島方言は伊吹式で「II-1/2/3/4/5」の類別体系である。各方言とも、音調型は異なるものの式と音調の下がり目を表す下げ核(上野1992)で解釈されるアクセント体系であり、相対的に高く始まる高起式をH、低く始まる低起式をL、語頭からモーラで数えた下げ核の位置を数字で表す(0は下がり目なし)。伊吹島方言は高起式、低起式の他に下降式(HHM..., Mは中音調)を持ち、これをFで表す。

表3, 4からわかるように、淡路方言以外の瀬戸内海諸方言ではa群とb群が区別される。すなわち、a群は(志々島を除いて)無核型、b群は1型となる傾向が顕著である。

a群とb群に区別がないのは淡路方言に限らず中央式に共通して見られる特徴である。表5, 6からわかるように、中央式諸方言ではa群もb群も原則としてH1(HLL)という型が対応し、1つの類としてまとまっているように見える。もしa群とb群が本来は別の類なら中央式諸方言でこれらが合流したことを意味し、a群とb群が1つの類なら瀬戸内海諸方言で(何らかの要因で)分裂したことを意味する。どちらが妥当かは、a群とb群に分裂を起こす音韻的な違いが認められるか否かだが、(5)を見る限り母音の広さや子音の有声性、特殊拍などを考慮しても両者に違いは認められない⁷。

⁶ 「京都」は京都市、「祇王」は滋賀県野洲郡旧祇王村(現在は野洲市)、「中川」は京都府葛野郡旧中川村(現在は京都市北区)、「明石」は明石市、「小野」は小野市、「すさみ」は和歌山県西牟婁郡すさみ町、「徳島」は徳島市、「高知」は高知市を指す。淡路以外の地点のデータは中井(2002)のCD-ROMデータより。高知市の話者のみ戦後の1946年生まれである。

⁷ 例えば、北奥方言では母音の広さを条件にアクセント型が分裂している(上野2021: 125-126)。

表7 瀬戸内海諸方言における3拍名詞第5類(x群)のアクセント対照

語 \ 地点	淡路	広島	志々島	高松	飯野	三本松	伊吹島
櫛	L2	L2	L2	L2	L2	L2	L2
茄子	L2	L2	L0	H1'	L2	L0	L0
柱	L2	L2	L2	L2'	L2	L2	L2
狸	L2	L2	H2	H1'	H0	L2	L2
睫毛	L2	ND	ND	L2'	L2	H1	L2

(NDはデータなし)

表8 中央式諸方言における3拍名詞第5類(x群)のアクセント対照

語 \ 地点	京都	祇王	中川	明石	小野	すさみ	徳島	高知
櫛	H1	H1	H1	L2	L2, H1	H1	L2	H1
茄子	H1	H1	H1	L2	L2	L2	L2	L0
柱	H1	H1	H1	L2	L2	L2	L2	L2
狸	H1	L2	H1	L2	L2, H1	L2	L2	H1
睫毛	H1	H1	H1	L2	L2	L2	L2	L2

表9 (瀬戸内海) 諸方言における3拍名詞第5類のアクセント対応のまとめ

類 \ 類別体系	中央式中央	中央式周辺	真鍋式	讃岐式	伊吹式
a群	H1	H1	H0/H2	H0	F0
b群	H1	H1	H1	H1	H1
x群	H1	L2	L2	L2	L2

a群とb群に関連して、3拍名詞第5類の一部(仮にx群とする)は瀬戸内諸方言でa群、b群とも違う型で出る。

表7からわかるように、瀬戸内海諸方言では「櫛」～「柱」の3語はおおよそL2で現れていてa群ともb群とも違う型で出る。「狸」、 「睫毛」も類似の傾向を示す。x群がL2で出る傾向は、表8のように中央式周辺部でも共通している。

以上をまとめると、3拍名詞第5類は概ね表9のように対応する。

音韻的に見ると、b群とx群には相補分布の関係が認められる。すなわち、b群は第2母音が概ね広い(例外は「錦」1語)のに対し、x群は第2母音が狭く第1母音が広い(「錦」はこの条件に該当せず)。a群とb群(およびx群)の間にはそのような条件が見られないことから、a群とb群(およびx群)は本来の対立の保持(古形)、b群とx群は新しく生じた変化(改新)となり、祖体系にa群と*b群⁸の2つを立てる必要がある。b群とx群は

⁸ *を付けたのは、現在のb群だけでなくx群との祖形となる類のためである。

元は1つの類だったと考えられるから、中央式周辺部ではa群とb, x群が区別され、b群とx群が分裂した後にb群がa群に合流したと推定される。中央式中央部でもb群とx群の分裂後にa, b, x群が全て合流した可能性もあるが、b群とx群の分裂が生じずにa群と合流したと考えた方が経済的である。よほど強い根拠がない限り、余計な過程を設けるべきではないため、中央式中央部ではb群とx群の分裂はなかったと考える。

同様に、3拍名詞第7類にも分裂が見られる⁹ため、2つの類を立てる（上野2006：36）。

- (6) 3拍名詞第7類 a 群…蚕, 兜, 千鳥, 椿, 緑, 病, …
3拍名詞第7類 b 群…苺, 後ろ, 辛子, 鯨, 薬, 鹽, 鉛, 畑, …

2.2 借用語とアクセント

方言のように系統的に近い言語では祖語からの伝承語と他言語（他方言）からの借用語の区別が困難である。しかし、アクセントから借用語と判断できる場合がある。例えば、ニワトリ「鶏」は鹿児島方言では予想されるA型ではなくB型で出、ウム「産む」は東北諸方言などでは予想される①型（無核型）ではなく②型で出る。また、オンナ「女」は出雲方言などで予想される①型ではなく③型で出る。これらの例外については、出雲方言について平子（2017）が「標準語から当該方言に借用された際に、「オンナ」という語形のみならず、アクセントもそのまま取り入れた」（p. 265）と述べるように、借用語のために対応が乱れていると考えられる。筆者も、和歌山県田辺市方言にて、一部の話者で次のような例を確認した。

- (7) 和歌山県田辺市方言の動詞アクセント
a. オチル L0 ≈ オツル H1「落ちる」, オリル L0 ≈ オルル H1「降りる」, ニゲル L0 ≈ ニグル H1「逃げる」, …
b. クズレル H0 ≈ クズルル H2「崩れる」, タスケル H0 ≈ タスクル H2「助ける」, ナガレル H0 ≈ ナガルル H2「流れる」

すなわち、この方言の本来の形である二段活用と、一段化した形とでアクセントが異なっている。(7a)の否定形はオチン L0, オリン L0, ニゲン L0, …のため、連用形に基づく内的な類推変化の可能性もあるが、(7b)の例は借用を示唆する。そのため、京阪地域から（一段化した）形式をアクセントごと借用したと考えられる（cf. 京都オチル L0, クズレル H0）。

3. 祖語のアクセント体系の再建

アクセントの再建では、音調型とともに（音韻）体系も考慮すべきと考える（cf. 上野

⁹ 例えば、東京ではa群は概ね①型（HLL）で、b群は概ね②型（LHH）で出る。

2020: 14-15)。音調型については、少なくとも日本語の場合、原則として上昇も下降も「遅れる」（語末方向へのシフト）という制限を設ける（cf. 上野2010）。

(8) LHH > LLH or LMH, HLL > HHL or HML, LHLL > LHHL or LLHL or LMHL, ...

上昇や下降の早まりは強い根拠がない限り認めない。この制限がないと、いくらでも恣意的な変化を想定することができ、任意の祖形の再建を可能にしてしまうためである。

語頭隆起は原則として語頭でLが連続する場合に生じると考える。ただし、低平調（全体がLの連続）の場合に限り、全体が高くなる変化（LLL > HHH or MMM）または半下降調への変化（LLL > HHM or HMM）を認める。

(9) LL > HL or ML or HH or MM or HM, LLH > HLH or MLH, LLHL > HLHL or MLHL, LLL > HLL or MLL or HHL or MML or HML or HMM or HHM or HHH, ...

語頭隆起によってHLHLのように音調の谷（HLH）が生じた場合、通常は後ろの山が消失する（HLH > HLL）が、その他にダウンステップ（HLH > HHM）と稀に高平化（HLH > HHH）によって音調の谷が解消されると考える（cf. 松森1993: 40）。

語頭隆起とは逆に、高平調の語頭の低下を認める。

(10) HH > LH or MH, HHL > LHL or MHL, ...

(9)と(10)に関連して、下降と上昇の強化（ML > HL, MH > LH）を認める。

とりわけ、上昇と下降の遅れは実際に世代差として諸方言で広く観察されている変化であり（上野2010, 2020）、日本語のアクセント変化の方向として自然なものと言え、それに逆行する上昇と下降の早まりは1拍分程度でしか起こらない変化と考える（LH... > HH..., ...HF > ...HL）。

変化を模式的に書けば、(11)のようになる。

(11) a. 上昇の遅れ  > 
 b. 下降の遅れ  > 
 c. 語頭隆起  > 
 d. 語頭低下  > 

また、祖体系は、諸方言が分岐する直前の（安定した）段階と考える。そのため、類の統合は同じでも、音調型が分岐直前の段階でない場合は祖体系とは考えない。

循環的に起こる変化の場合、同じ変化が途中で何度も生じた可能性があるが、その段階が別の実証されない限り、「オッカムの剃刀」に従って説明に必要な最小限の変化に留める。

さらに、変化の中間段階であっても、体系全体が式や核で解釈可能かについても考慮する。変化の過渡期は音韻論的解釈が難しいことも予想されるが、アクセントのように極めて

コンパクトな体系の場合は、音調のゆれが仮に大きくても、体系自体は安定していると考えられるためである。

3.1 日本祖語のアクセント体系

日本祖語のアクセント体系について、本稿は上野（2006：37）の再建に従う。

(12) 日本祖語のアクセント体系の音調型

I-1	* $\bar{H}M$ (1拍)	II-1	* HM	III-1	* HHM
I-2	* F ($\bar{H}L$)	II-2	* HL	III-2	* $HML \approx HHL$
I-3	* L	II-3	* LL	III-3	* HLL
I-4	* R	II-4	* LH	III-4	* LLL
I-5	* $\bar{R}F$ (1拍)	II-5	* LF	III-5a	* LLH
		II-6	* RH	III-5b	* LLF
		II-7	* RL	III-6	* LHH
				III-7a	* LHL
				III-7b	* LHF
				III-8	* RHH
				III-9	* RLL

(III- は3拍名詞。Rは上昇調)

4拍語以上は類としては立てられていないため記さないが、高起群（高く始まる群）は $HHM...$ の半下降調，低起群（低く始まる群）は $LL...$ の低平調で，下げ核によってピッチが大きく下降し，低起群では下げ核の前に「そこで上がろうとする力」である昇り核（上野1992：11）によるピッチの上昇がある。高起下降式を \backslash ，低起平進式を $_$ ，下げ核を $^$ ，昇り核を $^$ で音韻表記すると，(12)は(13)のようになる。

(13) 日本祖語のアクセント体系の音韻表記

I-1	* $\backslash O$	II-1	* $\backslash OO$	III-1	* $\backslash OOO$
I-2	* $\backslash O^1$	II-2	* $\backslash O^1 O$	III-2	* $\backslash OO^1 O$
I-3	* $_ O$	II-3	* $_ OO$	III-3	* $_ O^1 OO$
I-4	* $_ ^1 O$	II-4	* $_ O^1 O$	III-4	* $_ OOO$
I-5	* $_ ^1 O^1$	II-5	* $_ O^1 O^1$	III-5a	* $_ OO^1 O$
		II-6	* $_ ^1 OO$	III-5b	* $_ OO^1 O^1$
		II-7	* $_ ^1 O^1 O$	III-6	* $_ O^1 OO$
				III-7a	* $_ O^1 O^1 O$
				III-7b	* $_ O^1 OO^1$
				III-8	* $_ ^1 OOO$
				III-9	* $_ ^1 O^1 OO$

3.2 西南部九州アクセント祖体系

(3)のように、西南部九州式の類別体系はII-1・2/3・4・5となっている。(12)で明らかのように、この類別体系では、日本祖語の高起群同士、低起群同士が同じ型に合流している。

上野 (2011, 2012) は次のような祖体系を再建する。

(14) 高起群での西南部九州アクセント祖体系への変化

**HHMMM	>	*HLLLL
**HHMML	>	*HLLLL
**HHMLL	>	*HLLLL
**HLLLL	=	*HLLLL
**HLLLL	>	*HLLLL

(** は日本祖語のアクセントに対応)

すなわち、HM > HL (下降の強化) と HLL... > HHL... (下降の遅れ) の変化を想定する。これにより、元の核の下降 (ML) は消失する。

低起群の変化については上野の再建に変遷が見られる。

LHHHH, **LHLLL, **LHHLL, **LHHHL, **LLHHH, **LLHLL, **LLHHL, **LLLHH, **LLLHL, **LLLH から、上野 (2011) は上昇と下降の遅れで *LLLH になったとし、上野 (2012) は (LLLH, **RHHHH も含め) 語頭が LM... ≈ MH... に全て変化し、上昇位置での対立を失った後、下降の遅れを起こして *LMMM になったとする¹⁰。低起群の *LM... への変化は *HHL... との張り合い関係のためと説明する。また、途中に三型などの安定した段階はなく、速やかに二型に至ったと述べる。

ところが、*LM... ≈ *MH... の説明として出される讃岐式の変化は、讃岐式の L 式が祖語の *LH... のみに対応し、そもそも上昇位置での対立がないことから不相当と思われる¹¹。西南部九州祖体系への変化で想定されるのは、元の上昇位置での対立を消失させる式音調であり、讃岐式とはプロセスが全く異なる。さらに、西南部九州諸方言のアクセント体系では語頭の上昇調 **R... (『名義抄』で去声点始まりのものに対応) も低起群へ取り込んでいる点で中央式や讃岐式の L 式と異なる (中央式、讃岐式では **R... は高起群に合流した) が、讃岐式の上昇の早まりが LH... ≈ HH... と 1 拍程度なのに対し、**LLLH > *MHHHH はあまりに距離が長く、讃岐式の例だけでは説得性に欠ける。

また、上野 (2011, 2012) の後に出た研究ではあるが、佐賀県の方言のアクセントは、西南部九州祖方言に 3 つ (以上) の対立があったことを示唆し、二型に至る前段階として III-1・2/4/5・6・7 の類別体系が推定される (五十嵐・平子 2014)。

以上をもとに、本稿では次のような修正案を提示する。

¹⁰ Uwano (2009) は 3 拍名詞について、高起群は *HHL, 低起群は *LHH へ変化したとするが、中間段階は示されていない。

¹¹ 讃岐式では祖語の *LL... は高起群化した。

(15) 日本祖語から西南部九州アクセント祖体系（西南九祖）への変化試案

	日本祖語	[1]	[2]	[3]	[4]	西南九祖
II-1	**HM	= *HM	= *HM	= *HM	= *HM	> *HL
II-2	**HL	> *HM	= *HM	= *HM	= *HM	> *HL
II-3	**LL	= *LL	> *HL	> *HH ¹	= *HH ¹	> *LH ⁽¹⁾
II-4	**LH	= *LH	> *LL	> *HL	> *HH ¹	> *LH ⁽¹⁾
II-5	**LF	> *LH	> *LL	> *HL	> *HH ¹	> *LH ⁽¹⁾
II-6	**RH	= *RH	> *LH	> *LL	> *HL	> *LH ⁽¹⁾
II-7	**RL	> *RH	> *LH	> *LL	> *HL	> *LH ⁽¹⁾
III-1	**HHM	= *HHM	= *HHM	= *HHM	= *HHM	> *HHL
III-2	**HHL	> *HHM	= *HHM	= *HHM	= *HHM	> *HHL
III-3	**HLL	> *HHM	= *HHM	= *HHM	= *HHM	> *HHL
III-4	**LLL	= *LLL	> *HHL	> *HHH ¹	= *HHH ¹	> *LHH ⁽¹⁾
III-5a	**LLH	= *LLH	> *LLL	> *HHL	> *HHH ¹	> *LHH ⁽¹⁾
III-5b	**LLF	> *LLH	> *LLL	> *HHL	> *HHH ¹	> *LHH ⁽¹⁾
III-6	**LHH	> *LLH	> *LLL	> *HHL	> *HHH ¹	> *LHH ⁽¹⁾
III-7a	**LHL	> *LLH	> *LLL	> *HHL	> *HHH ¹	> *LHH ⁽¹⁾
III-7b	**LHF	> *LLH	> *LLL	> *HHL	> *HHH ¹	> *LHH ⁽¹⁾
III-8	**RHH	> *LHH	> *LLH	> *LLL	> *HHL	> *LHH ⁽¹⁾
III-9	**RLL	> *LHH	> *LLH	> *LLL	> *HHL	> *LHH ⁽¹⁾

高起群は下降強化で一気に *HHL... となるのではなく、[1] のように一旦下降式無核 *HHM... を経ると考える (cf. 上野2020 : 12)。

低起群のうち、低平型はいち早く語頭隆起を起こし、すぐに語末核型に転じた ([2])。その他の型も遅れて語頭隆起を生じた ([3], [4])。

一部の方言では *HHM に下降強化が生じた時期との関係で、低起群由来の *HHL の一部が混同し、高起群に紛れた (そうであれば、西南部九州アクセント祖体系は(15)の [4] の段階と考えた方が良いでしょう)。

高起群では低平型からの語頭隆起があったとは考えないものの、低起群に語頭隆起を認めるのは、上野 (2006 : 10) で批判された金田一説 (下降型を低平型を経て語頭隆起から導く) と同じ仮説に基づくことになるが、低平型からの語頭隆起を想定した方が、去声の不規則な対応などの説明が容易になると考える。

語頭隆起を想定する場合、*HHL > *HHH⁽¹⁾ と *HHM との対立の保持が問題となるかもしれないが、伊吹島方言では HHM と合流せずに HHL > HHF の変化が生じており (上野 1985a), 実現可能な変化である。

低起群は語頭隆起により全て *HH... を経るので、*MH... ≈ *LM... は LL... などからの不自然な上昇の早まりを考える必要はなく、諸方言によく見られる語頭の低下 *HH... > *MH ≈ *LH... で良い。*R- も語頭隆起を起こしたと見るが、他の低起群より隆起が遅れたため、高起群 *HM, *HHM と紛れ対応に乱れが生じたか。

3.3 琉球祖語のアクセント体系

琉球諸語には下げ核が弁別的な方言（名瀬方言など。上野1996）、昇り核が弁別的な方言（与論方言など。上野1999）、上げ核（次を上げようとする力。上野1992：11）が弁別的な方言（沖永良部方言など。横山2022）が分布する。南琉球にも、（核かはさておき）下がり目が弁別的な方言がある（多良間方言、与那国方言など。松森2010、平山・中本1964）。

東北方言のような言い切り形と接続形の交替（上野2020）がなくとも、上昇と下降の遅れのみを認める枠組みでは、上げ核や昇り核から同じ位置での下げ核への変化は困難である。

(16) 下げ核から昇り核、上げ核への変化

LHLLL	>	LLHLL	>	LLHLL	>	LLHHH	>	LLLHH
OO ₁ OO						OO ¹ OO		OO ₁ OO
下げ核						昇り核		上げ核

下げ核から昇り核、上げ核への変化は上昇と下降の遅れで説明可能だが、下げ核への変化は逆行したプロセスを考えるか、LLLHH > HLLHH > HLLLL > HHLLLのように語頭隆起で元の形に戻る必要があるが、このような循環した変化はオッカムの剃刀によって却下される。従って、琉球祖語は下げ核が弁別的だったと考える。

現在の琉球諸語は基本的にA、B、Cの3つの型が区別されるため、祖語も三型アクセントだったと仮定する。北琉球の名瀬方言、沖永良部方言、与論方言の核の位置から、次の体系を想定する。

(17) 琉球祖語のアクセント核の位置

- A類：/o, oo, ooo, .../（無核）
 B類：/ó, oó, ooó, .../（語末核）
 C類：/-, óo, oóo, .../（次末核）

C類には分節音の条件異音でóoo, ...もあった（2拍目が音韻的に弱い場合）と考える。上野（2018：106）は（仮に三型だった場合の）琉球祖体系を次のように再建する。

(18) 上野（2018）による琉球アクセント祖体系

- | | | |
|----------------------|-----|------|
| A：* $\bar{H}M$ （1音節） | *HM | *HHM |
| B：* $\bar{L}H$ （1音節） | *LH | *LLH |
| C：--- | *RL | *LHL |

しかしながら、名瀬方言、多良間方言などではB類に対応する型の語頭が高く始まる。西南部九州アクセント祖体系を再建する際に主張したように、筆者は上昇の早まりを認めないため、独立して高く変化したのでなければ、琉球祖語で語頭が高かったことになる。従っ

て、次のような音調型を再建する。

(19) 琉球祖語のアクセント体系の音調型

A類：* $\bar{H}M$ （1拍），* HM ，* HHM ，* $HHMM$ ，...

B類：* H^1 ，* HH^1 ，* HHH^1 ，* $HHHH^1$ ，...

C類：-，* HL ，* HHL ，* $HHHL$ ，...

すなわち、無核型と有核型では全体の音調も下降調と平進調で異なっていたと考える。

(20) 琉球アクセント祖体系からの変化例：名瀬市芦花部方言

A : * HHM	>	* HHH	>	* LHH	>	LLH	/	$_000/$		
				=		* HHH	=	HHH	/	$_000/$
B : * HHH^1	>	* HHH	>	* LHH	>	LLH	/	$_000/$		
				=		* HHH	=	HHH	/	$_000/$
C : * HHL	=	* HHL	>	* LHL	=	LHL	/	$_00^10/$		
	>	* HLL	=	* HLL	=	HLL	/	$_0^100/$		

B類の語末の核（語末核）が失われ、A類が半下降調から高平調に変化してA類とB類が合流した。C類のうち2拍目が弱のものは* $00^10 > 0^100$ と変化し頭高型になった。上昇の遅れが生じたものと高平調のままのものに音韻条件で分裂し式の対立が生じた。

(21) 琉球アクセント祖体系からの変化例：与論麦屋方言

A : * HHM	=	* HHM	>	* LLL	>	$MML / MMM...$	/	$000/$
B : * HHH^1	>	* HHF	>	* LLF	>	$LLF / LLH...$	/	$00^f0/$
C : * HHL	=	* HHL	>	* LHL	>	$LHL / LHH...$	/	$0^f00/$
	>	* HLL	>	* HLL	>	$HHL / HHH...$	/	$^f000/$

A, B, C類全てで上昇の遅れを起こし、さらに下降の遅れが生じて下げ核から昇り核の体系になった。C類のうち2拍目が弱のものは* $00^10 > 0^100$ と変化し頭高型になった。これは琉球祖語で下げ核が弁別的だったことの傍証と考える（昇り核の場合、上野2021などの奥羽方言の例を参考にすれば、* $0^f00 > 00^f0$ と通常は右にずれると思われる）。また、下降の遅れによって、言い切り形（.）と接続形（...）の交替が生じた。

(22) 琉球アクセント祖体系からの変化例：多良間方言

A : * HHM - MMM	>	* HHH - HHH	>	HHH - HHH	/	$0-0/$
B : * HHH - LLL	>	* HHH - HLL	>	HHH - HHL	/	$0-0_L/$
C : * HHL - LLL	=	* HHL - LLL	=	HHL - LLL	/	$0_L-0/$

A類は半下降調から高平調に変化した。B類は語末核が次の単位（語）にずれ、 H が拡張

した結果、現在のような2つ目の韻律語にLが付与される（五十嵐2016）体系になったと考える。

(23) 琉球アクセント祖体系からの変化例：与那国方言

A : *HMM-MMM	=	*HHM-MMM	=	*HMM-MMM	>	LHH-HHH	∩ <u>○</u> /
B : *HHH-LLL	>	*HHH-HLL	>	*LLL-HHH	>	LLL-LLL	/ <u>○</u> /
C : *HHL-LLL	>	*HHH-LLL	>	*LHH-HHL	>	LHH-HHH ¹	∩ <u>○</u> ¹ /

A類は半下降調から高平調に変化し、さらに語頭の低下を生じたが、この変化はしばらく生じず、非下降調のB類で語末核が次の単位（語）にずれ、さらに上昇と下降の遅れが進んだことで低平調になった。遅れてC類でも下降の遅れと（B類ほどではないが）上昇の遅れが生じた。上昇と下降の遅れにより、アクセント単位が文節へと拡張した。

3.4 日琉祖語のアクセント体系

琉球祖語のA, B, C類と日本祖語の類には概ね次の対応がある。

(24) 琉球祖語のA, B, C類と日本祖語の類の対応

I-1,2, II-1,2, III-1,2,(3)	::	A
I-3,(4),(5), II- <u>3,4,5</u> , III- <u>4,5</u>	::	B
II-(<u>3</u>), <u>4,5</u> , III-(<u>4</u>), <u>5,6,7</u>	::	C

すなわち、日本祖語の高起群は琉球祖語のA類に対応し、低起群はB類とC類に対応する。また、R...（上昇調）始まりは概ねC類に対応する（児玉2017:25）。

琉球祖語のB, C類は高く始まると推定したため、日本祖語で低くなったか、琉球祖語で語頭隆起したかのいずれかとなる。(13)の日本祖体系は上昇と下降の両方が弁別的だが、(19)の琉球祖体系は下降のみが弁別的なことから、琉球祖語側で改新が生じたと考える。すなわち、西南部九州と同様の変化を想定する。

(25) 琉球祖語での語頭隆起

**HM, HL	>	*HM	=	*HM	=	*HM
**LL	=	*LL	>	*HL	>	*HH ⁽¹⁾
**LH, LF	>	*LH	>	*LL	>	*HL

ところで、(24)のように、日本（祖）語の類と琉球（祖）語のA, B, C類には対応にずれが認められ、2拍名詞第4類と5類がB類にもC類にも対応する。このずれを琉球祖語での（不規則な）改新と見る場合、日琉祖体系に（日本祖語とは異なる）新たな類を立てる必要はない。しかし、異なる体系同士の接触など、ずれの要因が説明できないのであれば、共通祖語に区別があったと考えるしかない。その場合、2拍名詞には1A, 2A, 3B, 3C, 4B,

4C, 5B, 5C の8つの類を立てる必要がある。

琉球祖語のB類は語末核, C類は次末核 (penult. 後ろから2番目に核あり) のため, 次のように日琉祖語のアクセント体系を再建する。

(26) 日琉祖語のアクセント体系再建試案

I-1A	*H̄M	/^o/	II-1A	*HM	/^oo/	III-1A	*HHM	/^ooo/
I-2A	*F	/^o¹/	II-2A	*HL	/^o¹o/	III-2A	*HML	/^oo¹o/
I-3B	*L	/_o/	II-3B	*LL	/_oo/	III-3A	*HLL	/^o¹oo/
I-4B	*R	/_¹o/	II-4B	*LH	/_o¹o/	III-4B	*LLL	/_ooo/
I-5B	*R̄F	/_¹o¹/	II-5B	*LF	/_o¹o¹/		*LLH	/_oo¹o/
			II-4C	*RH	/_¹oo/	III-4C	*LHH	/_o¹oo/
			II-5C	*RL	/_¹o¹o/	III-5B	*LLF	/_oo¹o¹/
						III-5C	*LHL	/_o¹o¹o/
						III-6C	*RHH	/_¹ooo/
						III-7C	*RLL	/_¹oo/

(27) 日琉祖体系から日本祖体系へ

	日琉祖語	[1]	日本祖語
II-1A	**HM	=	*HM = *HM
II-2A	**HL	=	*HL = *HL
II-3B	**LL	=	*LL = *LL
II-4B	**LH	=	*LH = *LH
II-4C	**RH	=	*RH > *LH
II-5B	**LF	=	*LF = *LF
II-5C	**RL	=	*RL > *LF
III-1A	**HHM	=	*HHM = *HHM
III-2A	**HHL	=	*HHL = *HHL
III-3A	**HLL	=	*HLL = *HLL
III-4B	**LLL	=	*LLL = *LLL
	**LLH	>	*LLL = *LLL
III-4C	**LHH	>	*LLH > *LLL
III-5B	**LLF	=	*LLF > *LLH (a群に対応?)
III-5C	**LHL	=	*LHL > *LLF (b群に対応?)
III-6C	**RHH	=	*RHH > *LHH
III-7C	**RLL	=	*RLL > *LHL

III-4C は **LHH > *LLH > *LLL となるのに, II-4B は **LH > *LL とならないのは, II-4C の **RH と合流し **R... を継承するためと考える。

(28) 日琉祖体系から琉球祖体系へ

	日琉祖語	[1]	[2]	[3]	琉球祖語
II-1A	**HM	= *HM	= *HM	= *HM	= *HM
II-2A	**HL	> *HM	= *HM	= *HM	= *HM
II-3B	**LL	= *LL	= *LL	> *HL	> *HH ⁽¹⁾
II-4B	**LH	= *LH	> *LL	> *HL	> *HH ⁽¹⁾
II-5B	**LF	> *LH	> *LL	> *HL	> *HH ⁽¹⁾
II-4C	**RH	= *RH	> *LH	> *LL	> *HL
II-5C	**RL	> *RH	> *LH	> *LL	> *HL
III-1A	**HHM	= *HHM	= *HHM	= *HHM	= *HHM
III-2A	**HHL	> *HHM	= *HHM	= *HHM	= *HHM
III-3A	**HLL	> *HHM	= *HHM	= *HHM	= *HHM
III-4B	**LLL	= *LLL	= *LLL	> *HHL	> *HHH ⁽¹⁾
	**LLH	= *LLH	> *LLL	> *HHL	> *HHH ⁽¹⁾
III-5B	**LLF	> *LLH	> *LLL	> *HHL	> *HHH ⁽¹⁾
III-4C	**LHH	= *LHH	> *LLH	> *LLL	> *HHL
III-5C	**LHL	> *LHH	> *LLH	> *LLL	> *HHL
III-6C	**RHH	> *LHH	> *LLH	> *LLL	> *HHL
III-7C	**RLL	> *LHH	> *LLH	> *LLL	> *HHL

3.4.1 2拍名詞3C類の再建

「甕, 蚤, 浜, 骨」などは2拍名詞第3類だが琉球諸語でC類に対応する。他にも「瘤, 尻(シリ), 担桶(タゴ), 樽, 縁(ヘリ), 毬(マリ)」などが類似の対応を示すため, 1つの類として立てる必要があると考えられる。ところで, 「毬」の方言形にはマーリのような長母音の形が見られる¹²ため, 祖形を**ma^r:riと長母音形(3拍語相当)で再建すれば, 日本語諸方言ではIII-4Cと同じ**ma^r:ri > *ma:^ri > *_ma:riの変化が生じた後に短母音化(*_ma:ri > *_mari)し, 琉球諸語では**ma^r:ri > *ma:^ri > *_ma:ri > *^rma:^riの変化が生じた後に短母音化(*^rma:^ri > *^rma^ri)すれば第3類(*LL)とC類(*HL)に対応することが説明できる(長母音形が方言に見られることから, 短母音化は祖語のレベルではなく各方言で並行的に生じたと考える)。同様に, **no^r:mi, **pa^r:ma, **ta^r:goなどを再建する。なぜ長母音形になっているかについては, 「蚤」はno+mi (cf. シラミ), 「浜」はpa+ma (cf. 島, 沼, 山), 「骨」はpo+ne (cf. 胸), 「甕」はka+me (cf. 瓮(カ))のように形態素境界があったためという可能性もあるが, 「島, 山」はII-3Bのためそのみで説明はできない(形態素境界の消失, すなわち一語化した時期の違いに求められるかもしれない)。いずれにせよ, 「後」(アト), 「中」などのII-4C(**_oo)と区別するため, II-3Cは長母音形を立てる。II-3Cの変化については, III-4C(刀類)の認定とも関わる(五十嵐2018)が, 一応

¹²『日本国語大辞典 第2版』の「まり【鞠・毬】」の〈なまり〉として「マーリ〔栃木・埼玉・埼玉方言・千葉・神奈川・山梨・静岡・愛知・淡路〕マール〔淡路〕」が挙げられている(12巻, 529ページ)。

1つの類をなすと考える。

また、対応について問題が多いことが指摘されている（大門2020）ものの、III-5BとIII-5Cは日本語の3拍名詞第5類のa群、b群に対応するものと考ええる。

琉球諸語含め、II-3Cが長母音だった痕跡は少ないが、琉球諸語の場合、II-4Cの「海」、
「筋」、
「舟」、
「露」などに見られるように、第2音節の有声子音に長母音が吸収されたと考ええる（cf. 児玉2017:26）。II-3Cの候補語は「甕、蚤、浜、骨」の他「瘤、尻（シリ）、担桶（タゴ）、樽、縁（ヘリ）、毬（マリ）」を含め第2子音が有声音という共通点がある。

3.4.2 R（去声）始まりの語について

日本祖語の「巢」、
「齒」はそのまま日琉祖語にも $**/_\text{'su}/$ 、 $**/_\text{'pa}'/$ と再建できる。

2拍以上では、 $**\text{RH}$ 、 $**\text{RL}$ などのうち、1拍目が独立的なものは $**\text{R..}$ が保持されて去声始まりになったと考える（cf. 上野2006:36）。また、平安時代で去声始まりの語のうち、漢語などの借用語は日琉祖体系には遡らない。

一方、「百合」や「先ず」では1拍目が独立的でもなく、漢語のような借用語とも言えない。そのため、これらは $/_\text{'ju:ri}/$ 、 $/_\text{'ma:ldu}/$ と考えておき、II-3Cと同様に後で長母音の短縮があったものと見なす。「毬」は $/_\text{ma}^{\text{f}}\text{:ri}/$ のため、長母音内で昇り核の位置の対立があった（LHH vs. RHH）と解釈する¹³。

4. アクセント再建をめぐる

西南部九州、琉球ともに、高起群が無核化することから、低起群を含めいったん下げ核を完全に失い、昇り核のみが弁別的だった段階を想定する。東北の外輪式も同様に考える。

しかし、上野（2020:12）は北奥祖体系への途上のいずれの段階でも下がり目がある型を立てていて、北奥祖体系になるまでは常に下げ核が弁別的だったと考えているようだ。そうであれば、音調型だけでなく、下げ核は他の核から生じないという制約を考える必要があるかもしれない。平子（2017:269-271）も、高起群が無核化しても、低起群で下げ核が消失したとは言えないと述べる。

上記の推測が正しければ、低起群の変化には修正が必要だが、下げ核が再度生じることに大きな問題がなければ、高起群・低起群ともに同じ原理で説明したいと考える。もし、変化の各段階で「下げ核」が保持されている必要があるとすれば、(15)は(29)のように改める。

(29) 日本祖語から西南部九州アクセント祖体系への変化試案（改訂版）

	日本祖語	[1]	[2]	[3]	[4]	西南九祖
II-1	$**\text{HM}$	$= * \text{HM}$	$= * \text{HM}$	$= * \text{HM}$	$= * \text{HM}$	$> * \text{HL}$
II-2	$**\text{HL}$	$> * \text{HM}$	$= * \text{HM}$	$= * \text{HM}$	$= * \text{HM}$	$> * \text{HL}$
II-3	$**\text{LL}$	$= * \text{LL}$	$> * \text{HL}$	$> * \text{LH}^1$	$= * \text{LH}^1$	$= * \text{LH}^1(1)$

¹³ これはいささか不自然なため、 $**/_\text{'ju:ri}/$ 、 $**/_\text{'ma}^{\text{f}}\text{:du}/$ のような何らかの形態素境界があったものと考えたいが、現時点ではその証拠がない以上、このように再建せざるを得ない。

II-4	**LH	=	*LH	>	*LL	>	*HL	>	*LH ¹	=	*LH ⁽¹⁾
II-5	**LF	=	*LF	>	*LL	>	*HL	>	*LH ¹	=	*LH ⁽¹⁾
II-6	**RH	=	*RH	>	*LH	>	*LL	>	*HL	>	*LH ⁽¹⁾
II-7	**RL	=	*RL	>	*LH	>	*LL	>	*HL	>	*LH ⁽¹⁾
III-1	**HHM	=	*HHM	=	*HHM	=	*HHM	=	*HHM	>	*HHL
III-2	**HHL	>	*HHM	=	*HHM	=	*HHM	=	*HHM	>	*HHL
III-3	**HLL	>	*HHM	=	*HHM	=	*HHM	=	*HHM	>	*HHL
III-4	**LLL	=	*LLL	>	*HHL	>	*LHH ¹	=	*LHH ¹	=	*LHH ⁽¹⁾
III-5a	**LLH	=	*LLH	>	*HLL	>	*LHL	>	*LHH ¹	=	*LHH ⁽¹⁾
III-5b	**LLF	=	*LLF	>	*HLL	>	*LHL	>	*LHH ¹	=	*LHH ⁽¹⁾
III-6	**LHH	>	*LLH	>	*HLL	>	*LHL	>	*LHH ¹	=	*LHH ⁽¹⁾
III-7a	**LHL	>	*LLF	>	*HLL	>	*LHL	>	*LHH ¹	=	*LHH ⁽¹⁾
III-7b	**LHF	>	*LLF	>	*HLL	>	*LHL	>	*LHH ¹	=	*LHH ⁽¹⁾
III-8	**RHH	>	*LHH	>	*LLH	>	*HLL	>	*LHL	>	*LHH ⁽¹⁾
III-9	**RLL	>	*LHL	>	*LLF	>	*HLL	>	*LHL	>	*LHH ⁽¹⁾

5. まとめと課題

本稿では、日本祖語、琉球祖語および日本祖語のアクセント体系について、変化の方向に制限を設けた形での再建を試みた。日本祖語については上野（2006）の再建に同意する一方、西南部九州祖体系については本稿の立場では修正が必要なことを示し、それに基づいて琉球祖語のアクセント体系についても試案を提示した。そこから日琉祖語のアクセント体系についても再建を試みたが、比較的無理のない再建案が提示できたと考える一方、2拍名詞3C類や去声始まりのものについてはややすっきりしない部分が残ることになった。

また、本稿は基本的に名詞のアクセントに基づき再建を行ったが、本来であれば動詞についても併せて考える必要がある。しかしながら、琉球諸語については動詞アクセントのデータが（特に活用形について）まだ不十分であり、祖語のアクセント体系について再建できる段階ではないため、今回は議論の対象外とした。動詞を含む祖体系のアクセントの考察は今後の課題である。

また、本稿は24の対応のずれに基づいて日琉祖語に多くの類を立てる前提でアクセント体系の再建を行ったが、(5)、(6)を含め、二次的な分裂や借用による例外の可能性についても検討する必要がある。五十嵐（2018）は3拍名詞第4類とC類との対応が借用ないし第4類として再建すべきでない可能性を指摘し、大門（2020）は3拍名詞第5類b群と3拍名詞第7類a群が日琉祖語に遡らない可能性がある」と述べる。五十嵐（2022）は2拍名詞第4類と第5類がB類とC類に対応するのは琉球祖語での改新だとする仮説を示している。これらが全て正しければ、日琉祖語のアクセント体系は『名義抄』に代表される平安時代京都方言の体系と（少なくとも類の数について）変わらなかったことになる。仮にそうであっても、具体的な音調型や音韻解釈については研究の必要がある。上記の仮説の検討を含め、これらも今後の課題としたい。

引用文献

- 五十嵐陽介・平子達也（2014）「佐賀県北方町周辺方言における3拍5類の対応がアクセントの歴史的研究に与える示唆」日本言語学会第149回大会（愛媛大学）。
- 五十嵐陽介（2016）「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」『言語研究』150：33-57.
- 五十嵐陽介（2018）「3拍名詞第4類における本土日本語と琉球語間の1対2のアクセント型の対応について」『対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法』研究発表会 発表資料。
- Igarashi, Yosuke, Takubo, Yukinori, Hayashi, Yuka and Kubo, Tomoyuki (2018) Tonal Neutralization in the Ikema Dialect of Miyako Ryukyuan. In: Haruo Kubozono and Mikio Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization (Phonology and Phonetics Volume 27)*, 83-128. Berlin/Boston, De Gruyter Mouton.
- 五十嵐陽介（2021）「分岐学的手法に基づいた日琉諸語の系統分類の試み」林由華・衣畑智秀・木部暢子（編）『フィールドと文献からみる日琉諸語の系統と歴史』17-51. 東京：開拓社。
- 五十嵐陽介（2022）「2音節名詞第4／5類に対応する琉球祖語B類は改新であるとする仮説」日本言語学会第164回全国大会（オンライン）。
- 上野善道（1985a）「香川県伊吹島方言のアクセント」『日本学士院紀要』40(2)：75-179.
- 上野善道（1985b）「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(1)」『日本学士院紀要』40(3)：215-250.
- 上野善道（1987）「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(2)」『日本学士院紀要』42(1)：15-70.
- 上野善道（1992）「昇り核について」『音声学会会報』199：1-14.
- 上野善道（1995）「伊吹島方言アクセントの年齢別変化」『東京大学言語学論集』14：99-199.
- 上野善道（1996）「名瀬市芦花部・有良方言の名詞のアクセント体系」『東京大学言語学論集』15：3-68.
- 上野善道（1999）「与論島東区方言の多型アクセント体系」『国語学』199：188-174.
- 上野善道（2006）「日本語アクセントの再建」『言語研究』130：1-42.
- UWANO, Zendo (2009) On the Reconstruction of Japanese Accents. International Workshop on “the History & Reconstruction of Japanese Accent” .
- 上野善道（2010）「与那国方言のアクセントと世代間変化」上野善道（監修）『日本語研究の12章』：504-516. 東京：明治書院.
- 上野善道（2011）「N型アクセントとは何か」公開シンポジウム「N型アクセントの原理と成立」発表資料.
- 上野善道（2012）「N型アクセントとは何か」『音声研究』16(1)：44-62.
- 上野善道（2018）「これまでの琉球方言アクセント研究とこれから」『國學院雑誌』119(11)：97-108.
- 上野善道（2020）「北奥方言の昇り核の由来」『国語研究』83：1-26.
- 上野善道（2021）「岩手県田野畑村方言のアクセント調査報告：北奥方言アクセント祖体系との関連で」『国立国語研究所論集』20：115-147.
- 金田一春彦（1974）『国語アクセントの史的研究—原理と方法』東京：塙書房.
- 児玉望（2017）「アクセント核はどこから来たか」『ありあけ 熊本大学言語学論集』16：1-34.
- 大門知樹（2020）「方言アクセントから再建される日琉祖語の3拍名詞類別語彙」日本語学会2020年度春季大会（予稿集 pp. 127-134）.
- 中井幸比古（1984）「真鍋式アクセントの所属語彙」『言語学研究』3：81-116.

- 中井幸比古（編著）（2002）『京阪系アクセント辞典』東京：勉誠出版。
- 平子達也（2017）「外輪式アクセントの歴史的な位置づけについて」『アジア・アフリカ言語文化研究』94：259-276.
- 平田秀（2020）『三重県尾鷲方言のアクセント研究』（ひつじ研究草書〈言語編〉第163巻）東京：ひつじ書房。
- 平山輝男（編）（1960）『全国アクセント辞典』東京：東京堂出版。
- 平山輝男・中本正智（1964）『琉球与那国方言の研究』東京：東京堂。
- 松森晶子（1993）「日本語アクセントの祖体系再建の試み」『言語研究』103：37-91.
- 松森晶子（1997）「徳島県脇町・三加茂町のアクセントと本土祖語のアクセント体系」『国語学』189：15-29.
- 松森晶子・新田哲夫・木部暢子・中井幸比古（編著）（2012）『日本語アクセント入門』東京：三省堂。
- 横山晶子（2022）「鹿児島県沖永良部島国頭」『日本の消滅危機言語・方言の文法記述』363-435.

（2022年10月31日受理，11月10日掲載承認）

